

マエ・アト節のトキ解釈^(注1)

橋 本 修

0. はじめに

本稿は、現代日本語のマエ・アト節における、述部ル／タ形のとキ解釈の一部を明らかにすることを目的とする。本稿におけるマエ・アト節とは、以下のような、主名詞（被修飾名詞）「まえ」「あと」を修飾する節を指す（ただし、混乱を生じない範囲で、主名詞や、主名詞に付随する助詞類を含めた名詞句全体を指している場合もある）。

- (1) [御飯を食べる] まえ (に) 電話をかけた。
- (2) 細かいことは [引越しを済ませた] あとで (に) 考えよう。
- (3) [彼が政権から去った] あとが心配だ。
- (4) あの男の [日本に来る] まえの経歴を調べてみた。

本稿のいうマエ・アト節は、

- I (1) (2) のような、マエ節と主名詞とを合わせた名詞句全体が、はだか形（助詞を伴わない形）あるいはトキを指定する助詞「に」「で」を伴って、主節に対して副詞的にはたらく場合
- II (3) (4) のような、「が」「の」他の格助詞を伴って、純粋な名詞句としてはたらく場合

の、いずれの場合をも含む。先行研究の興味は主としてIの場合に偏っており、このことがマエ・アト節の分析の不十分さの一因になっているように思われる。マエ・アト節は、単純な頻度としては確かにIのような副詞的にはたらく用法が多いものの、これはトキに関わる名詞句一般に言えることであり、「まえ」「あと」がそれ自体として名詞でないということを意味してはいない。マエ・アト節のとキ解釈を自然なものとするためには、むしろこれらが基本的に

は連体修飾節である、ということをおさえておく必要がある。

1. 先行研究他

マエ・アト節のトキ解釈をめぐるには多くの論考があるが、これらの研究のほとんどが、マエ・アト節の出来事と、主節の出来事との時間的な前後関係^(注2)の分析に主眼を置いている。これらの先行研究の中で概ね共通理解となっているのは、以下のような点である。

(5) マエ・アト節のル／タ形は、主節との時間的な前後関係を示す

この場合の「時間的な前後関係」がテンスなのかアスペクトなのかについては先行研究のなかで意見が分かれているように見える。この点については三原1992、橋本1995で論じられているような微妙な問題があり、現在簡単に結論を出せる問題ではないので本稿では立場を保留する。

本稿が主に問題にするのは、先行研究の中で共通理解になっているかのように見える、(5)に一定の疑いがあるのではないか、という点である。(5)については、既に竹沢1993が、例外となる場合の一つを指摘している。

(6) 君が見た一年も前に、私はその映画をアメリカで見た。

(7) 君が会う2時間あとに、僕も山田さんに会う予定です。

(例文(6)(7)は竹沢1993のp127、例文(19)のa、bにそれぞれ当てる。ただし、本稿の趣旨に合わせて一部を省略したり、表記を改めた箇所がある。)

竹沢1993が述べるように、(6)(7)のマエ・アト節において、述部ル／タ形が、主節との時間的前後関係をあらわしているとは見るのは不可能であり、これらの例文の場合、このル／タ形は発話時との時間的前後関係をあらわしているのが自然である。例えば(6)で言えば、マエ節の「君が見た」という出来事は、主節「私はその映画をアメリカで見た」よりもあとに起こっているのだから、「君が見た」のタ形は、主節(の出来事)との時間関係をあらわしているとは考えられず、発話時との関係、具体的には発話時より以前に起こっていることをあらわしていると考えられる。(5)に対するこのタイプの例外

には、竹沢1993の述べるように、「マエ」「アト」という形態と、節内の述部との間に数量表現などの、別の要素（例文（6）（7）で言えばそれぞれ「一年も」「2時間」）が介在する場合に限って起こるという特徴がある。

このような例外がある一方、従来指摘されていない、別のタイプの例外もある。

- (3) [彼が政権から去った] あとが心配だ。
 (4) あの男の [日本に来る] まえの経歴を調べてみた。

例文（3）の「彼が政権から去った」という出来事は、主節「心配だ」よりも前に起こるから、「去った」のタ形が主節時との時間的前後関係をあらわす、いわゆる主節時基準をとっているということとはありえない。では、「去った」のタ形が発話時との関係をあらわす、いわゆる発話時基準をとっているかという点、「彼が政権から去った」が発話時よりもあとのことをあらわすので、これもあり得ないということになる。

例文（4）についても、「日本に来る」という出来事は、「調べてみた」という主節の出来事よりも、また、発話時よりも時間的に前なので、主節時基準でも発話時基準でもない、ということになる。

本稿では、このタイプのマエ・アト節を分析の中心に置く。このタイプのマエ・アト節は、（5）に対する例外となるばかりか、これも一般的に信じられている、

- (8) 従属節のル/タ形（テンス形式）は主節時基準か発話時基準かの、どちらかをとる

という原則に対しても例外となっている^(注3)。以下では、このタイプのマエ・アト節の、意味上の諸特徴について明らかにしながら、従属節一般、あるいはマエ・アト節一般について従来認められている（5）（8）の原則が、なぜこのタイプのマエ・アト節においては成り立たないのかについて考える。

2. 当該のマエ・アト節の諸特徴

問題のマエ・アト節が（5）（8）の原則に従わない原因を明らかにするに

は、問題のマエ・アト節を含む、各部分のトキ関係を、細かく見ていく必要がある。本稿は、以下のようなトキ分析を行って問題の解決を図る。

2-1 名詞「まえ」「あと」の相対性

名詞「まえ」「あと」は、次のような環境で用いられることがある。

- (9) 冬至は、大みそかよりまえだ。
 (10) こどもの日は、ひな祭りよりあとだ。

直感的にも肯定できるように、「まえ」「あと」というのは基準との相対的關係であって、基準がなければ成立しない概念である。このことはそれらの名詞が述語位置に立った(9)(10)において、基準をあらわす「大みそか」「ひな祭り」がないと十分な意味を持った文として成立しないということからも確かめられる。この場合、「まえ」「あと」が述語になるとき、主語以外にもう一つの項(「基準」をあらわす項)が必要だという意味で、二項述語的だということもできる。

このことを押さえた上で、マエ・アト節のトキ指示を考える。

- (11) [雨が降る] まえ
 (12) [鴨が北へ渡った] あと

上の(11)では、「まえ」が指している時点の基準になっているのは連体修飾節「雨が降る」である。トキ指示という観点から言い直せば、

「まえ」の指す時点



「雨が降る」の指す時点 = 「まえ」の基準点

という形であらわすことができるであろう。一方(12)でも、「あと」が指している時点の基準になっているのは連体修飾節「鴨が北へ渡った」である。トキ指示という観点から書き直せば、

「鴨が北へ渡った」の指す時点 = 「あと」の基準点
 ↓
 「あと」の指す時点

という形であらわすことができる。以上の分析は、極めて常識的で何の変哲もないように見えるが、後の考察の準備としては明示的な形で示しておく必要がある。

2-2 「まえ」「あと」にかかる修飾節のル/タ形の解釈

次に「まえ」「あと」にかかる修飾節のル/タ形の解釈について考える。この点については、以下のようなことが成り立っていると考える。

- (13) 「まえ」「あと」にかかる修飾節のル/タ形は、修飾節（の述部）の指す時点と、「まえ」「あと」の指す時点との前後関係をあらわしている。

これはより具体的に言えば、

- (14) 「まえ」にかかる修飾節のル形は、修飾節の指す時点の方が「まえ」の指す時点より後であることをあらわしている。
 (15) 「あと」にかかる修飾節のタ形は、修飾節の指す時点の方が「あと」の指す時点より前であることをあらわしている。

ということになる。2-1で見たように、修飾節の指す時点は名詞「まえ」「あと」の指す時点の基準点となっているわけで、修飾節のル/タ形は、「まえ」「あと」の指す時点から見て後なのか前なのを示しているということになる。

この(13)(14)(15)も一見当たり前のように見えるが、先行研究はこのような見方を事実上採用しておらず、以下のような立場をとっている。

- (16) 「まえ」「あと」にかかる修飾節のル/タ形は、修飾節（の述部）の指す時点と、主節の指す時点との前後関係をあらわしている。

これは具体的には、

- (17) 「まえ」にかかる修飾節のル形は、修飾節の指す時点の方が主節の指す時点より後であることをあらわしている。
- (18) 「あと」にかかる修飾節のタ形は、修飾節の指す時点の方が主節の指す時点より前であることをあらわしている。

ということであり、この(13) (14) (15))と(16) (17) (18))との違いが、問題の節のトキ解釈を適切に行えるかどうかの分岐点になる。この点については、次の2-3で見る。

2-3 マエ・アト節を含む文全体のトキ解釈

ここまでの考察を踏まえて、マエ・アト節を含む文全体のトキ解釈をおこなう。論述の都合上、

- ① 「まえ」「あと」が指す時点と、主節（の述部）の指す時点とが一致する場合
- ② 「まえ」「あと」が指す時点と、主節（の述部）の指す時点とが一致しない場合

の2つの場合に分けて考える。統語的環境との対応関係を見ておくと、①の場合はⅠにおけるⅠの場合は必ず①の場合になり、②の場合になるのはⅠにおけるⅡの場合のみである^(註4)。また、問題の節の解釈に直接関わるのは、②の場合である。

先に、①の場合について考えてみる。この場合、トキ解釈は以下のようになっていると考えられる。

例えば例文

- (1) [御飯を食べる] まえ (に) 電話をかけた。

においては、それぞれの要素の指す時点の前後関係は、以下のようになっている。

「まえ」の指す時点 = 「電話をかけた」が指す時点
 ↓
 「御飯を食べる」が指す時点 = 「まえ」の基準点

この場合、「まえ」にかかる修飾節「御飯を食べる」の述部ル形は、名詞「まえ」の指す時点より後であることをあらわしているのか、主節「電話をかけた」の指す時点より後であることをあらわしているのか、いずれに解釈しても矛盾をきたさないことから、直接的には分からない。言い換えれば、2-2における規則として、本稿の主張する(13) (14) (15)と、従来の(16) (17) (18)との、どちらが適切であるかは、この例文においては決めがたいということになる。このような事情はアト節を含む(2)の場合でも同様である。

一方、②の、「まえ」「あと」が指す時点と、主節(の述部)の指す時点とが一致しない場合はどうであろうか。例えば、例文

(3) [彼が政権から去った] あとが心配だ。

における、各要素の指す時点の前後関係は、以下のような場合があり得る。

「心配だ」が指す時点
 ↓
 「彼が政権から去った」が指す時点 = 「あと」の基準時
 ↓
 「あと」が指す時点

このような時点間の前後関係が成立している場合、(16) ((18))のように連体修飾節「彼が政権から去った」の述部タ形は、連体修飾節が指す時点が、主節「心配だ」が指す時点より前であることをあらわしているとは解釈できない。連体修飾節の指す時点が、「心配だ」が指す時点よりも後にあるからである。従ってこのとき、「去った」のタ形に可能な解釈は、連体修飾節の指す時点が、名詞「あと」が指す時点より前であることをあらわしている、という解釈、即ち、本稿の主張する(13) (より具体的には(15))の解釈のみである。

また、例文

(4) あの男の [日本に来る] まえの経歴を調べてみた。

においても、以下のような場合があり得る。

「まえ」の指す時点

↓

「日本に来る」が指す時点 = 「まえ」の基準点

↓

「調べてみた」が指す時点

この場合の連体修飾節「日本に来る」の述部ル形は、(16) ((17)) のように、連体修飾節の指す時点が主節「調べてみた」の指す時点より後であることをあらわしているとは解釈できない。連体修飾節の指す時点が、「調べてみた」の指す時点より前にあるからである。従ってこの場合も、連体修飾節「日本に来る」のル形に可能な解釈は、連体修飾節の指す時点が、名詞「まえ」の指す時点より後であることをあらわしているという、(13) (より具体的には(14)) の解釈の方である。

このような2つの場合を総合してみると、①の場合と②の場合の、連体修飾節の述部ル/タ形を統一的に解釈しようとするのが適切である。即ち、一般的にマエ・アト節 (の中の連体節) のル/タ形は、一貫して、マエ・アト節 (の中の連体節) が指す時点と、名詞「まえ」「あと」の指す時点との前後関係を示していると見るべきであり、先行研究 ((16)) のように、主節の指す時点との時間関係を直接あらわしているとは見るべきではない。

3. マエ・アト節の特徴

以上のように、マエ・アト節においては、そのル/タ形が主節の指す時点ではなく、名詞「まえ」「あと」の指す時点との関係をあらわしていることが明らかになった。繰り返しになるが、これは、1. における

(5) マエ・アト節のル/タ形は、主節との時間関係を示す

が成り立たないということであり、その背景にある、

- (8) 従属節のル／タ形（テンス形式）は主節時基準か発話時基準かの、どちらかをとる

にも、例外がある、ということでもある。

一方、連体節、副詞節などの従属節のル・タ形が、多くの場合主節時か発話時のどちらかを基準としており、ここでのマエ・アト節のように、それ以外の時点を中心に（それ以外の時点との時間関係をあらわす）ことが特殊であることも、事実である。では、マエ・アト節は、従属節一般の中で、どの点が特殊なのであろうか。

従属節のル／タ形が主節時か発話時かのどちらかを基準にとるという（8）の背景には、「発話時以外に、明確な時点を目指すことのできるのは、節（述部）だけである」という考え方が潜在しているように思われる。確かに、例えば

- (19) [この池で魚を捕った] 人は罰せられる。

のような文において、連体修飾節「この池で魚を捕った」のタ形が、連体節が指す時点と、名詞「人」が指す時点との前後関係をあらわしているとは考えにくい。「名詞「人」が指す時点」というものが想定困難だからである。しかし前述のように、名詞の中でも、「まえ」「あと」のような、いわゆるトキ名詞においては、規定上当然ながら、時点というものを指すことが十分に可能である。マエ・アト節が既に見たような振る舞いを示すのは、名詞「まえ」「あと」が、それ自体として「時点を目指すことができる」という特徴を持っているからであると、ひとまず言うことができる。

4. 今後の問題

繰り返しが多くなるが、ここで、これまでの考察の大まかな要点をまとめておく。

- ① マエ・アト節（の中の連体節）の述部ル／タ形は、従属節の指す時点と、名詞「まえ」「あと」の指す時点との前後関係をあらわしているのであ

て、従属節の指す時点と主節の指す時点との前後関係を直接あらわしているとは言えない。

- ② マエ・アト節のこのような振る舞いは、名詞「まえ」「あと」が普通の名詞とは異なり、時点を指すことができるという性質に支えられている。

以上の結論を踏まえて、今後明らかにすべき点は、以下のような点であると思われる。

第一点は、本稿で扱ったマエ・アト節のような振る舞いをする節が、どの程度のひろがりを持っているのかという点である。発話時でも主節時でもない時点を基準にとる節は、かなり限定されていることは確かであるが、マエ・アト節だけというわけではない。また、時点を指すことのできる名詞を修飾する節のすべてがマエ・アト節と同じ振る舞いをするわけではない。その意味で上の結論の②は不十分であり、問題の振る舞いが起きる一般的な条件が、より厳密に規定されなければならない。この点については既に考察に入っており、近い将来別稿にて公表の予定である。

第二点は、問題の節のル/タ形の、従属節のル/タ形一般における位置づけである。これは、それぞれの従属節のル/タ形がテンス的なのかアスペクト的なのかというような問題をも含むので、かなり難しい問題といえるが、いずれはそれなりの解決が図られなければならない。

この他にも未解明の点は多い。沈1984・岩崎1994、橋本1996に挙げるように、主節時基準でも発話時基準でもない節は、ここで見たタイプだけではなく、他にいくつか存在している。これらの間の類似、相違を明らかにするなど、すべきことが多く残されている。

注

- (注1) 本稿は1995年12月に行われた日本語文法談話会の昼休み時に、大阪外国語大学の三原健一先生との議論がきっかけとなっている。有益な示唆を下さった三原先生に記して感謝申し上げる。
- (注2) この場合の「前後関係」は当然「同時」の場合をも含む。ただし議論を単純化するために、本稿で扱う節については、原則として、基準時と「同時」であるという解釈を要求する状態述語を持つものを避けてある。また、一般にマエ・アト節においては、「まえ」「あと」の語彙的な性質上、状態述語は出現しにくく（「まえ」「あと」が時間的前後関係でなく空間

的前後関係をあらわしている場合を除く)、わずかにアト節内にテイタ形が現れる程度であり、本稿が主として問題にするマエ・アト節に関しては、「同時」という場合を考える必要は少ない。

- (注3) (8)は先行研究において、明文化されることは少ないが、ある従属節のトキ解釈において、「これは主節時基準ではないから発話時基準である」「これは発話時基準でないから主節時基準である」というような論述が多く見られることなど、(8)を暗黙裡に前提としていることが多い。管見の限り、従属節一般のル/タ形に関して、発話時基準でも主節時基準でもない可能性を明確に認めているのものとしては、野田1995の、以下のような論述が挙げられる。

…このように、テンス形式は、基本的に、独立文や独立度が高い従属節では発話時である「今」を基準にした現場依存の視点で使われ、従属度が高い従属節や従属文では主文の事態の時などを基準にした文脈依存の視点で使われる。… (p339, 下線は筆者)

この記述によれば、野田1995はテンス形式(ル/タ形)の基準時として発話時と主文の事態の時(=主節時)以外の時を意識していることが分かる。ただし、基準時として発話時と主節時以外の、どのような時点が基準時になりうるのかについて具体的に述べられてはいない。

- (注4) 0.における統語環境Ⅱの場合には、意味的には一般に「マエ・アト節のル/タ形は、主節時とは独立に(無関係に)決まる」ということであり、常に(本稿が問題にしている節のように)主節時と異なる時点を基準にするというわけではない。「独立に」決まった基準時が、主節動詞の意味等の諸条件により、主節時と一致する場合もある。以下に一例を挙げる。

(20) [彼は太郎が逮捕される]まえの状況を見ていた。

参考文献

- 井島正博 1991「従属節におけるテンスとアスペクト」『東洋大学日本語研究』4
 岩崎 卓 1994「ノデ節・カラ節のテンスについて」『国語学』179
 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
 沈矛一 1984「複合文の接続助詞でくくる節の述語のテンスー「スルが」と「シタが」,「スルので」と「シタので」など」『語学教育研究論叢(大東文化大学語学教育研究所)』1
 砂川有里子 1986『日本語文法セルフ・マスターシリーズ2 する・した・している』くろしお出版
 竹沢幸一 1993「日本語の時の副詞節の統語的特性に関する一考察」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究(平成4年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書)』筑波大学文芸・言語学系

- 野田尚史 1995 「現場依存の視点と文脈依存の視点」『複文の研究（下）』くろしお出版
- 橋本 修 1996 「引用節の基準時」『文藝言語研究 言語篇（筑波大学）』29
- 福田嘉一郎 1996 「近代語の時の表現-連体法述語の場合」『国語国文』65-5
- 町田 健 1989 「日本語の時制とアスペクト」アルク
- 三原健一 1992 『時制解釈と統語現象』くろしお出版